

Ⅲ 一般演題 A 5. 突発性難聴に対する高気圧酸素療法 (第2報)

名古屋大学医学部

耳鼻咽喉科 柳田則之 三宅 弘

高気圧治療室 高橋英世 小林繁夫

小西信一郎 浅井れい子

第1外科 榊原欣作 城所 仁

川村光生

突発性難聴は、急激に発症する原因不明の感音性難聴であるが、感音性難聴にも拘らずその初期のものでは聴力が回復する可能性をもっている。原因として、内耳循環障害、Virus感染、アレルギー、中毒、炎症、内耳窓の破裂等があげられているが、現在の所内耳循環障害と考えるものが多い。

従って治療法も、内耳血行の改善に重点がおかれ、星状神経節遮断を中心に、血管拡張剤、Vitamin剤、ATP、Steroid等を併用しているのが現在の臨床において共通した治療法である。

私共は血行改善の最終目的たる酸素補給の目的を達成するため、高気圧酸素療法を行い、昨年の学会においては15名の患者について好成績が得られたことを報告したが、今回は36名の患者について、その成績を報告する。

〔治療法〕

2.0又は2.5ATA、60分をもって1回の治療とし、連日施行、合計7~15回の治療を行った。全ての患者にVitaueurin 3錠、ATP 120mg、Kallikrein 60単位の内服を併用した。

〔臨床成績〕

36例についてその成績が得られた。これらを、A)発病から1週間以内に治療したもの、B)1~2週間に治療したもの、C)3週~約1ヶ月に治療したもの、D)2~3ヶ月に治療したもの、E)6ヶ月以上経過したもの、に分類して述べる。

A)1週間以内に治療したもの 10例

低音障害型、水平型の聴力低下を示すものでは、完全に回復したものが多く

みられる。しかもこれらは1回の治療後聴力が急激に好転したものが多い。

B) 1～2週間に治療したもの 12例

水平型の聴力低下を示すものは完全に回復したものが多くみられるが、A群に比べては悪い。しかし聾型のものうち、かなり聴力回復を認めたものがある。

C) 3週間～約1ヶ月に治療したもの 9例

この時期になると聴力回復は殆んど望めないとされているが、回復した症例があり、しかも他の治療では効果がなかったものがある。

D) 2～3ヶ月で治療したもの 4例

高音漸傾型の1例にやや聴力回復がみられた。この症例も他の治療で効果のなかったものである。

E) 6ヶ月以上で治療したもの 1例

効果はみられなかった。

〔総括並びに考按〕

突発性難聴の治療に当り、その予後を左右する最大の因子は発症から治療開始までの期間で、殆んどすべての症例が30日以内に聴力が固定するため、初期に治療する程、聴力回復が期待出来ることは当然であり、高気圧酸素治療においても全く同様である。

本疾患の治療効果についてみると、新鮮な症例では自然治癒もあることから、聴力が回復しても、すべて高気圧治療の効果とすることは甚だ問題があるが、第1回の高気圧治療で聴力が急激に好転した例が極めて多いことは少なくとも治療効果があったと考えざるを得ない。更に1ヶ月を経過した症例でも聴力の回復した症例があり、しかもそのが他の治療では全く効果がなかった症例であることから高気圧酸素治療による効果と考えられる。

又、星状神経節遮断を中心とした治療と比較してもすぐれた効果を示していることから、本疾患に対する有力な治療法と考えられる。

A ; 1 週間以内に OHP 10 例

	症例数	完 治	著 効	有 効	無 効
低音障害型	2	2			
水 平 型	5	4	1		
高音急墜型	1		1		
聾 型	2			1	1

B ; 1 ~ 2 週間に OHP 12 例

	症例数	完 治	著 効	有 効	無 効
水 平 型	5	3	1	1	
高音漸傾型	2		2		
聾 型	5		3	1	1

C ; 3 週間~約 1 ヶ月に OHP 9 例

	症例数	完 治	著 効	有 効	無 効
水 平 型	3	1		1	1
高音漸傾型	1			1	
高音急速型	3				3
聾 型	2				2

D ; 2 ~ 3 ヶ月に OHP 4 例

	症例数	完 治	著 効	有 効	無 効
水 平 型	2			1	1
高音漸傾型	1			1	
聾 型	1				1

〈質問〉 東京歯科医科大学 真野喜洋

医歯大耳鼻科より依頼された突発性難聴に対する高圧酸素治療を table 5 にて施行したところ効果のあったものは低音障害発症 1 例のみで、他の症例 (7 例) には効果は認められず、OHP 効果に関しては疑問を持っております。多少障害改善がみられたケースも約 3 日後には旧に戻ってしまう傾向があり、OHP の有効性を云々するにはまだ早急であり、症例を重ねる必要があるのではないのでしょうか。

〈答〉 名古屋大学耳鼻科 柳田則之

聴力に対する効果を論じるには 1) 発症から治療開始までの期間、2) 聴力低下の型、程度、3) OHP 治療の Chamber の種類や時間の相異を考慮すべきで、1) 治療開始日別、2) 難聴のタイプ別、の効果比較が必要であり、一概に比較することは適当でない。3) ストレスが大きく影響するといわれる本疾患に対して、One man chamber を使用したか巨大 Chamber を使用したかも、貴院の成績との差を生んだのではないか。あるいは酸素の与え方の細かい点の相異も関係しているのかも知れない。

〈質問〉 群大麻酔科 小川竜

私共も突発性難聴患者の治療を主として Stellate ggl block を中心として行っており、無効の例に OHP therapy を行ったが予後は良くなかった。時期が問題と思うが、Stelle ggl block と OHP の併用又は両者の選択についてどう考えるか。

〈答〉 名古屋大学耳鼻科 柳田則之

1) 星状神経節遮断 (SB) で効果のなかったものに OHP を行った症例は数例あるが、そのうち 1 例は OHP で著効を示した。その他のものでは OHP でも効果の少ないものが多いが、これは発病からの時期が極めて重要である

ことを考慮しなければならない。

2) S B と O H P の併用については現在検討中である。